



徳永真一郎

Shin-ichiro Tokunaga

川口成彦

Naruhiko Kawaguchi

(Fp)

『日本モーツァルト愛好会』は、モーツァルトの作曲精神に基づき「通でも通でなくても楽しめる会」をモットーとし、モーツァルトに関するコンサートや講演などを通じて、会員の誰もがモーツァルトの音楽を楽しめることを目的とする音楽愛好会である。同愛好会の第489回例会が「俊英の開く新しい世界～フォルテピアノとギターの協演」と題して、フォルテピアノの川口成彦、ギターの徳永真一郎という、共に斯界の将来を担うであろう若き俊英を演奏者として招き、東京オペラシティ・リサイタルホールにて開催された。

川口は各国での古楽コンクール等への受賞歴を持ち、現代のピアノだけでなく、フォルテピアノやチェンバロ等の歴史的楽器による演奏活動も展開している。徳永は説明するまでもなくギター界の若手演奏家として指折りの逸材である。この日のコンサートでは、川口が1820年製のヨハン・ゲオルグ・グレーバのオリジナル楽器、徳永は黒田義正が2000年に製作したルネ・フランソワ・ラコート・レプリカを使用して演奏を行なった。

プログラムはモーツァルト作品とそれに触発された古典期～ロマン派の作品で構成され、デュオ演奏に加えて各々のソロ演奏も披露された。徳永はソル〈魔笛の変奏曲〉と「ドン・ジョ

ヴァニのセレナーデ」を主題に用いたメルツの幻想曲を演奏、19世紀ギター特有のやや金属的な音色も活かしつつ、要所にモダンな柔らかな美音と幅広いダイナミックレンジを織り交ぜる妙技を見せつけスケールの大きな快演を聴かせた。川口とのピリオド楽器による共演でも繊細なニュアンスの隅々まで見事に描き出し、昔日のサロン音楽もさもありなんと思わせる豊饒なひと時を味わせてくれた。

プログラム：恋とはどんなものかしら～歌劇『フィガロの結婚』K.492より（モーツァルト）、ピアノ・ソナタ・ヘ長調 K.280（モーツァルト）*、モーツァルトの歌劇『魔笛』の主題による序奏と変奏曲 Op.9（ソル）**、ロマンス・ト長調（アリアーガ）*、ポップリ・ト短調 Op.53（フンメル）、歌劇『ドン・ジョヴァニ』の主題による幻想曲 Op.28（メルツ）**、舟歌ト短調 Op.41（メルツ）、マエストロ対位法氏の小葬送行進曲ハ短調 K.453a（モーツァルト）*、幻想曲ハ短調 K.396（モーツァルト）*、ピアノ・ソナタ・ハ長調 K.545（モーツァルト／グリーグによる2台のピアノ版に基づく編曲）

* 川口成彦ソロ、** 徳永真一郎ソロ、その他は川口&徳永によるデュオ演奏

[7月19日／東京オペラシティ・リサイタルホール]